

平成 30 年 5 月 17 日現在

機関番号：32632

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02730

研究課題名(和文)ビデオによる振り返りを用いた外国語学習プロセスのミックス法による分析

研究課題名(英文)Mixed Methods Analysis of Video-based Foreign Language Learning Process

研究代表者

岡田 靖子 (Okada, Yasuko)

清泉女子大学・付置研究所・非常勤講師

研究者番号：40364830

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本人英語学習者の英語力とスピーチスキルを向上させるために活用した学習者のビデオ映像の教育的効果を検証することである。英語力上位・下位のクラスからモデルとなるビデオ(上位モデル・下位モデル)をそれぞれ選び、大学生2グループに対して順序を変えて視聴させる追試を実施した結果、ビデオの視聴順序については一貫した結果が認められなかった。テキストマイニングと内容分析の結果から、両モデルの観察が学習者の動機づけを高めることに役立つことが明らかになった。英語授業における学習者のビデオ映像活用は、学習者が深いアプローチを採るような授業実践を可能にすることを提案する。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to examine the educational effects of video viewing on students' foreign language proficiency and public speaking skills in an English as a foreign language (EFL) classroom at a Japanese university. We conducted replication studies on how watching model videos in proficiency order affects the effects model video viewing has among two groups of Japanese students, with one group watching them in high- to low-proficiency order and the other group in the reverse order. The findings from quantitative analysis were not consistent. Further, the findings from text mining and qualitative analysis indicated that watching both high-proficiency and low-proficiency model videos enhances learners' motivation to practice public speaking. We propose that using video recordings in the EFL classroom creates a learning environment that encourages students to develop a deeper understanding of the learning process.

研究分野：英語教育

キーワード：モデルビデオ 観察学習 英語教育 振り返り学習 混合研究法 スピーチ アクティブラーニング
学習者評価

1. 研究開始当初の背景

最近の外国語教育の傾向の一つとして、IT 機器を活用することにより学習者の動機付けを高めたり、外国語能力の向上を目指したりする試みが挙げられる。例えば、ビデオの活用は、音声と映像の両方を生かすことができることから、教育の現場でも様々な目的（例：学習者または教師作成によるビデオ、評価を目的としたビデオ）のために利用されている。

研究代表者は日本人大学生を対象とし、英語授業の一環としてスピーチ指導を行い、授業における学習者のビデオ映像活用に関する研究を進めてきた。岡田・いとう（2014）では、英語授業においてスピーチを実施し、そのビデオ映像を視聴させて自己評価を行った結果、話し方や英語の強弱アクセントのつけ方などに対する気付きが高まることが明らかになった。

また Okada(2012)では、学習者のスピーチのリハーサルと本番のパフォーマンスをビデオ撮影し、その映像を使って自己評価を実施した。その結果、全体的にリハーサルより本番のパフォーマンスが高く評価され、発表に対する学習者のモチベーションを高める可能性が示唆された。これらの先行研究を概観すると、Kolb（1984）の経験学習モデルで示されているサイクルが暗示的に取り入れられていることが明らかである。

Okada, Sawaumi, & Ito の研究（2014）では英語力上位の学習者をモデルとして採用し、英語力上位群と下位群の2グループに観察させ、その教育的効果を検証した。その結果、英語力上位群はモチベーションが高まる効果が見られた一方、英語力下位群の学習者のやる気を低減させることが示唆された。学習者の英語力とモデルビデオ教材の組み合わせによってこのような効果が現れる可能性が考えられる。

ビデオ映像を活用した教育的手法については、教育実習中の実習生や若手教員の育成を目的とした研究成果はあるが、外国語教育において、学習者の個人差に留意した録画ビデオの活用効果の検証を目的とした研究はこれまでには見られなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、学習者の適性によって効果が異なることを顧慮しつつ、外国語能力とスピーチスキルを向上させるために活用したビデオ映像の教育的効果を検証することである。また、その継続的な活用によってもたらされる効果について混合研究法を用いて分析することで立証し、自律的な学習者を育成するための手法を確立することである。そこで、研究期間内で以下の2点について明らかにすることを試みた。

(1) ビデオ映像を活用したタスクの改良

研究代表者はこれまでに、ビデオ映像の活

用の中で尺度を使った自己評価やピア評価を取り入れてきた。また、学習者自身のビデオを視聴するときは、与えられたタスクが明確でなくても集中して視聴する傾向があるが、ほかの学習者のビデオを視聴する場合はタスクの目的をより明確にする必要性も確認した。学習者の個人差に留意した評価方法を開発することによって、信頼性・妥当性の高い評価結果を得ることが可能になる。

(2) 視聴覚的な省察による自律学習者の育成

学習者自身のビデオ映像を視聴して学習するプロセス（ビデオ自己モデリング）と他の学習者のビデオ映像をサンプルとして視聴する学習プロセス（観察学習）を統合することによって、より深い気づきを促すことが可能になる。自己および他者のビデオ映像を活用することで過去の経験をより明確に分析することが可能となり、特に学習者の弱点を気付かせることに効果がある。この気づきを外国語能力の向上に活かすために、学習者の個人差に留意しつつビデオ映像を見せることが重要である。テキストによる省察に対してテキストマイニングによる分析や内容分析を行うことによって、ビデオ自己モデリングや観察学習などの効果を立証できる。

3. 研究の方法

本研究では Kolb(1984)の経験学習モデルを参考にしながら、スピーチ実践・ビデオ映像による省察・モデル観察・学習者のスピーチスキル向上のための分析という新たな学習モデルを構築した。このモデルに沿って収集された量的・質的データをミックス法（混合研究法）により分析・考察した。データ収集は、研究代表者が勤務する都内の大学で行われた。

(1) 研究参加者

必修科目である英語コミュニケーション（半期開講・週2回）を履修する大学生6グループが参加した。履修者数は合計 97 名だったが、研究参加に同意しない学生を分析から除いたため、本研究の対象者となった学生は 82 名である。詳細は表 1 のとおりである。

表 1 参加者の内訳

	Aグループ	Bグループ	合計
研究 1	12	15	27
研究 2	10	14	24
研究 3	19	12	31

(2) 指導手順

大学の英語授業で効果的なスピーチの仕方を指導した。主な指導内容は(1)スピーチの内容、(2)態度・アイコンタクトなどの非言語的要素、(3)強弱ストレス・リズム・イントネーション・発音などの周辺言語的要素で

あった。スピーチは授業内で全3回実施された。

下記の手順を用いて集めた自己評価・ピア評価を統計分析、自由記述2種類をテキストマイニングおよび内容分析を実施し、その結果を考察した。さらに3回目の実証研究では、インタビュー調査も実施し、その内容を分析して考察を加えた。全3回の実証実験では同じ指導手順が用いられた。

スピーチの実践

学生は事前に与えられたトピックについて原稿を作成し、それを暗記したうえでスピーチに臨んだ。スピーチ原稿は180-200単語で作成された。スピーチはビデオ撮影され、発表者以外の学生は聞くことに集中していた。

ビデオ映像による省察

ビデオ撮影されたスピーチを授業で視聴した。学生はビデオを見ながら自己評価・ピア評価シートを記入した。評価項目はYamashiro & Johnson (1997)を参考にして作成された。11項目から構成され、ボイスコントロール(声の大きさ・話すスピード・イントネーション・話し方)とボディランゲージ(姿勢・手足の位置・アイコンタクト・顔の表情)、有効性(トピックの選択・言葉使用・語彙)について4段階で評価された。

モデルビデオの観察

2回目と3回目のスピーチ実施前に、学生にモデルビデオを視聴させた。モデルとなるビデオ映像は、研究代表者が以前に担当した英語授業で行われた日本人大学生によるスピーチから採用された。参加する学習者の英語力を考慮するために、英語力の高いクラスと英語力が低いクラスからそれぞれ8名がモデルビデオとして研究に使用された。2回目のスピーチ実施前にAグループは英語力上位モデル、Bグループは英語力下位モデル、3回目の実施前にはAグループは下位モデル、Bグループは上位モデルをそれぞれ視聴した。

振り返り

2回目と3回目のスピーチ実施後、リフレクション・ペーパーを記入させ、モデルビデオの観察が学生のスピーチにどのような影響を与えたかについて自由に記述してもらった(自由記述1)。また3回目のスピーチ実施後には、英語力上位・下位モデルの観察について感じたことを自由に書いてもらった(自由記述2)。

(3) 結果

ビデオの視聴順序(Aグループ・Bグループ)と測定時期(1回目・2回目・3回目)を要因とした 2×3 による分散分析を実施したところ、自己評価では交互作用効果は有意ではなかったが、ピア評価は研究1ではボイスコン

トロール: $F(1.49, 29.84) = 5.74, p = .01, \eta_p^2 = .22$; ボディランゲージ: $F(2, 40) = 4.16, p = .02, \eta_p^2 = .17$; 有効性: $F(1.51, 30.24) = 5.47, p = .02, \eta_p^2 = .22$ であった。研究2ではボイスコントロール: $F(2, 42) = 5.31, p < .01, \eta_p^2 = .20$; ボディランゲージ: $F(2, 42) = 11.34, p < .01, \eta_p^2 = .35$; 有効性: $F(1.32, 27.66) = 6.16, p = .01, \eta_p^2 = .23$ であり、研究3ではボイスコントロール: $F(2, 52) = 4.06, p = .02, \eta_p^2 = .13$; ボディランゲージ: $F(2, 52) = 10.28, p < .01, \eta_p^2 = .28$; 有効性: $F(1.56, 40.44) = 36.49, p < .01, \eta_p^2 = .58$ であった。研究1と2の結果では、学習者が下位モデルの後に上位モデルを視聴したグループではピア評価が有意に高くなったが、研究3では一貫した結果が得られなかった。

また、自由記述回答を質的およびテキストマイニングを用いて分析したところ、全ての研究において上位モデルだけでなく下位モデルを観察することが学習者のモチベーションを高めることに役立つことが明らかになった。言語に対する気づきを高めるだけでなく、姿勢やアイコンタクトなどのプレゼンテーションに関するスキルを向上させる可能性を示唆した。

さらに、3回の実証研究から得られた知見をもとに、達成目標理論やアクティブラーニングなどの別の観点からビデオ映像活用の効果を考察し、スピーチ指導における学習者のビデオ映像の教育的効果について議論した。その結果、英語授業におけるスピーチ指導は原稿を作成し(書く)、話す練習をし(話す)、クラスでスピーチをする(発表する)という活動が含まれることから、溝上(2014)が定義するアクティブラーニングを伴う活動に学習者が関与できることが示唆された。

また、達成目標理論の観点から検討した場合、学習者は英語を学ぶために知識を習得しなければならない。その知識を効率よく習得するために、遂行目標(他者からの肯定的な評価を得ることや否定的な評価を得ないようにすることが目標)あるいは熟達目標(自身の努力によって成長できることや与えられた目標に挑戦してそれを持続させることが目標)のいずれか、または両方の目標志向性を高める指導が不可欠であると考えられる。

社会的比較理論からみると、大学生の場合、発達段階であり、異なる他者との比較よりも類似した他者との社会的比較が多く行われる時期でもある。学習者にモデルとなるビデオ映像を見せるのであれば、学習者の年齢や英語力が類似したモデルを視聴させると影響を受けやすいことが推測される。

4. 研究成果

まず、本研究の1つ目の目的であるビデオ映像を活用したタスクの改良であるが、上位モデルだけでなく下位モデルの観察からも学習者は多くの学びを経験することが可能に

なったことである。ビデオ媒体によるスピーチのモデルを観察することで、それまでに学んだ知識を自身の能力を高めるために活用し、スピーチ参加への意欲を引き出すことが確認されたことは大きな成果であろう。

2 つ目の目的である視聴覚的な省察が自律学習者の育成に結び付いたかどうかについては本研究からは明らかにすることはできず、さらなる研究が必要であろう。しかし、本研究では自身やクラスメートのビデオ映像も学習者のパフォーマンスに影響を与え、さらなる練習につながることも示された。また、スピーチを3回実施することで、学習者にスピーチスキルの改善の余地を与えることが可能となった。

さらに学習者のビデオ映像を活用した学びは、アクティブラーニング型の授業の中で大きな役割を果たす可能性がある。英語力のあまり高くない学習者であっても、スピーチスキルに関する知識を得て、英語でスピーチ原稿を作成し、その内容を練習して暗記する。さらにはそのスピーチを授業で発表し、そのビデオ映像を視聴することで自身のパフォーマンスを視聴覚的に振り返ることが可能となる。このような一連の学習プロセスを経験することで深い学びへとつながり、さらには学習者の人間性を涵養すると思われる。

モデルビデオを観察させる際、上位モデルと下位モデルをどのような順番で提示するかという点については一貫した結果が得られなかったため、効果的なビデオの観察順番については示唆が得られなかった。しかし、学習者の英語力がそれぞれ異なるように、モデルとなるビデオ映像も英語力の高いモデルだけでなく、学習者の英語力に近いモデルを観察させることによって、学習者のスピーチスキルと英語力の向上につながると考えられる。

最後に、英語スピーチのモデルとして英語母語話者ではなく、学習者と同じ日本人大学生を採用することに大きな意義があることを指摘したい。なぜなら、他の学習者のパフォーマンスを見ることは勇気を与え、学習者の自信を高めることにつながるからである。このように、学習者のモチベーションを高める方法の一つとして、他の日本人大学生による英語授業における成長過程を提示することが挙げられるだろう。今後の研究では、学習者の英語授業における成長を示すビデオ映像を活用することで、日本人大学生の英語力の向上に貢献したい。

<引用文献>

岡田靖子・いとうたけひこ. 自己評価・ピア評価からみた学習者のビデオ映像活用の効果, 日本大学経済学部研究紀要, 67, 2014, 47 - 55.

Okada, Y. Using video feedback comparison with EFL students, 清泉

女子大学言語教育研究, 4, 2012, 17 - 33.

Kolb: *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development*, Prentice-Hall, 1984.

Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T. The effects of sample performance observation on EFL learners' oral presentations, *Proceedings of CLASiC 2014: Knowledge, Skills and Competencies in Foreign Language Education*, 2014, 394 - 413.

Yamashiro, D. A., & Johnson, J. Public speaking in EFL: Elements for course design. *The Language Teacher*, 21(4), 1997, 13 - 17.

溝上慎一. 「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」東信堂, 2014.

5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計8件)

Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T. How Do speech model proficiency and viewing order affect Japanese EFL learners' speaking performances? *Computer-Assisted Language Learning-Electronic Journal*, forthcoming. 査読あり.

岡田靖子・澤海崇文・いとうたけひこ「英語授業におけるビデオ映像を活用したアクティブラーニング」『外国語教育メディア学会関東支部紀要』2, 2018, 23 - 37. 査読あり.

岡田靖子・澤海崇文・いとうたけひこ「日本人学習者のスピーチ不安軽減を目指すビデオ映像の活用」『埼玉女子短期大学研究紀要』37, 2018, 137 - 150. 査読なし. DOI: 10.15115/00000494

Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T. Empowering Japanese EFL learners with video recordings, *Proceedings of INTED 2017 Conference*, 2017, 2612 - 2628. 査読なし.

岡田靖子「英語スピーキング・パフォーマンスにおけるピア評価の匿名化」『清泉女子大学言語教育研究』9, 2017, 69 - 86. 査読あり.
<http://id.nii.ac.jp/1115/00000974/>

Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T. Effects of observing model video presentations on Japanese EFL learners' oral performance, *Electronic Journal of Foreign Language Teaching*, 14(2), 2017, 129 - 144. 査読あり.

<http://e-flt.nus.edu.sg/v14n22017/okada.pdf>

岡田靖子・澤海崇文・いとうたけひこ・藤井勉「達成目標理論研究の概観と英語オーラルプレゼンテーション指導への示唆」『日本大学経済学部研究紀要』82, 2016, 59 - 72. 査読なし.

岡田靖子「社会的・継時的比較から見たビデオ映像活用の提案」『清泉女子大学言語教育研究』8, 2016, 33 - 46. 査読あり.
<http://id.nii.ac.jp/1115/00000924/>

〔学会発表〕(計6件)

Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T.
Effect of model video viewing order on speaking performances in Japanese EFL classrooms. GLoCALL and PCBET Joint International Conference, September 2017, Brunei Darussalam.

Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T.
Impact of model video observation on performance in the Japanese EFL classroom. The 15th Asia TEFL International Conference and the 64th TEFLIN 2017 International Conference, July 14, 2017, Yogyakarta, Indonesia.

Okada, Y. & Sawaumi, T. Anonymous peer assessment: Oral presentations in English as a foreign language. The 4th International Conference of the Asian Association for Language Assessment, June 22, 2017, Taipei, Taiwan.

Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T.
Empowering Japanese EFL learners with video recordings. The 11th International Technology, Education and Development Conference, March 6-8, 2017, Valencia, Spain.

岡田靖子「社会的・継時的比較から見たビデオ映像活用の提案」外国語教育メディア学会第56回全国研究大会. 2016年8月9日, 早稲田大学.

岡田靖子・澤海崇文・いとうたけひこ
Effects of peer- and self-evaluation of videos on Japanese EFL learners' oral performance. Globalization and Localization in Computer-Assisted Language Learning 2015 International Conference, November 13, 2015, Daejeon, Korea.

(1) 研究代表者

岡田 靖子 (Okada, Yasuko)
清泉女子大学・言語教育研究所・非常勤講師
研究者番号: 40364830

(2) 研究分担者

伊藤 武彦 (Ito, Takehiko)
和光大学・現代人間学部・教授
研究者番号: 60176344

澤海 崇文 (Sawaumi, Takafumi)
流通経済大学・社会学部・助教
研究者番号: 60763349